

山・作物研究・アフリカ

高村泰雄

旅の 記録

株の記録

— 山・作物研究・アフリカ —

旅の記録―山・作物研究・アフリカ―

一九九八年三月一〇日

著者 高村泰雄

発行 農耕文化研究振興会

〒六〇四―〇九三六

京都市中京区麩屋町二条下る尾張町

第二ふや町ビル六〇五

電話 〇七五―二五五―六五五〇

印刷

旭プリント

〒六六三―八二四七

西宮市津門稲荷町四―十一

I 旅のはじまり―山

サルトロ・カンリ初登頂の前後 ― 三

パキスタンからの便り ― 三三

II 作物研究の日々

イネ研究の日々 ― 六三

大島からの便り ― 七一

暖地でのサトウキビ栽培 ― 八三

岡山でのイグサ研究 ― 八九

III 旅をつづけて

ボリビアの農耕と作物分布 ― 九七

ビルマへの旅

一一三

サゴヤシに魅せられて

一二七

IV アフリカへのサファリ——旅はつづく

ミオンボ林のひとと農業

一四五

東アフリカにおける在来農業システムとその変容

一五一

アフリカ在来農業の現状と将来展望

一六三

アフリカを近くする人々

一七七

旅はつづく

一八一

あとがき

一九九

旅
の
は
じ
ま
り
—
山

サルトロ・カンリ初登頂の前後

あの頃は山のことばかり考えていた。「山岳部入学」「山岳部卒業」を文字どおりに実践していたのが、農学部および農学研究科在学中のわたしの生活だった。一九五八年（修士二回生）のチヨゴリザにつぐサルトロ・カンリへの遠征はその総仕上げとなった。幸いにして初登頂のメンバーに選ばれてその頂上に立つことができた。この小文は、登頂までの経過を綴ったもので京大学士山岳会『AACK時報』第二号（一九六三年）に掲載された。わたしにとっては旅立ちの記録ともいえるものである。

一、第五キャンプ

頂上攻撃のためのアタック・キャンプ（最高キャンプ）をどの高さまで進めるか？アタックの方法は？

アドヴァンス・ベースキャンプ（前進基地）ではサルトロの正面の巨大な雪壁を眺めつつ、幾度も討論が繰り返された。日本を出発するまでに出ていた結論は、できるだけ高くアタック・キャンプを進める。約七、二〇〇メートルの肩のあたりがよからう。そのためには、六、五〇〇メートル付近にわれわ

れの第四キャンプができたとして、さらにもうひとつ七、〇〇〇メートル近くに第五キャンプをたて、その上で七、二〇〇メートルにアタック・キャンプをということになる。文字どおりオーソドックスにポーター・メソッド（極地法）を採用するならば、これが妥当な線だと考えられた。ところが、さてサルトロの正面を眼の前にしてみると、これをもう一度考え直す必要がでてきた。五、五〇〇メートルのとりつきから、六、〇〇〇メートルのプラトール（やや平坦な雪面）に出るルートが思いがけず悪い。その上の斜面は雪崩が牙をむき出して獲物を待っている。そういうところを幾度も上下して、当初の計画どおり沢山のテントをあげて、がっちり足場をかためつつポーター・メソッドを展開することが果たして許されるかどうか。第三キャンプをプラトールに建設しても、高所用ポーターの協力が辛うじて得られるのはそこまでだ。荷上げ能力にも限度がある。「第三キャンプから上のキャンプの数は極力少なくして、高所キャンプでの滞在人員、日数を最低限におさえよう。雪崩の危険も大きい。こんなところであり前のポーター・メソッドを採ったのでは生命がいくつあっても足らぬ。この山はラッシュで登る山だ。それで試みて駄目ならばこの山は放棄だ。ラッシュ・タクティクスの気持で突っ走らない限りこの山は登れないぞ！」いろいろ考えた末、加藤副隊長が、全員にこう話した。たしかにその通りだと思う。しかし、若い隊員であるわたしたちの胸中には何だか割り切れぬものが少し残された。

わたしたちは、今度のサルトロ・カンリは、できるだけ余裕をもって、願わくば全員登頂をやりたいという風に考えていたのだ。その上、突撃戦法をとって、再びハントの二の舞いをしたくはないという気もあった。ハントがサルトロに挑んだとき、かれらの最前進キャンプは、高度六、七〇〇メートル足らずの地点にあった。最初第七キャンプまでつくる予定だったが、頂上までの距離を誤算し、頂上はそ



第3キャンプの谷さん(高度6,000メートル)

の第六キャンプから討てると考えたのだ。不幸にして高度計の指針が狂っており、第六キャンプの高度を実際よりも三〇〇メートル高く、七、〇〇〇メートルと誤解していたせいもある。悪化した天候のため登頂を断念し、ハントがガスの中にみえかくれする頂上を無念のまなざしでみつめながら引き返した地点は、実はようやくサルトロの肩をすぎた辺りだった。頂上まであと高度差二〇〇メートルばかりとかれらは報告しているが、実はもつと低いところまで達したにすぎなかったとおもわれる(三一頁の図を参照)。

たとえ頂上攻撃がラッシュ戦法の気持で行なわれるにしても、アタック・キャンプは七、〇〇〇メートル以上のところに欲しい。そのためには、基本的にやはりポーラ・メソッドで、がっちり荷上げしなくてはならぬのじゃないか。そういった疑問が湧く。ハントの隊のプラン・メーカー、ジェイムス・ウオラーも、当初は全員登頂を考えて七、〇〇〇メートル以上にキャンプを進めるつもりではあったのだが、天候悪化がす

べてをふいにしてしまった。「充分な時間的余裕と好天候に恵まれれば、われわれの次に来る者は必ず登頂に成功しよう。ただし、この山で七、〇〇〇メートル以下の地点から頂上攻撃するのは賢明でない。エベレストの経験が示したように、問題は高度差だけでなく、頂上までのたいへん長い水平距離だ。このことをよく考えておかねばならぬ。」後年一九五三年に、はじめてエベレスト登頂に成功したハントの報告はこう結ばれている。

ハント隊がこの山に挑んでから二七年後の一九六二年七月二二日、われわれはサルトロ・カンリ峰の、高度まさに七、〇〇〇メートルの地点にアタック・キャンプを設営した。第五キャンプ。林登攀隊長はじめ多くの強力な仲間によってつながれたフィクスト・ラインの終着点。そして頂上への出発点である。

そこまで押し上げられた斉藤・高村・バシールの胸の中は、これからはじまる大詰めの登攀の幕開きを前にして、責任とサポート隊に対する感謝の気持で一杯になる。六、五〇〇メートルの第四キャンプから上の斜面はいぜんとして雪が深かった。かたちはポラー・メソッドのようではあるが、とにかく第五キャンプを一日のうちにできるだけ高いところまで押し上げようと、重荷を負って、高所ポーターの力をかりないサポート隊の苦闘は午後四時までつづいた。肩につづく広大な斜面の一角、ほんとうに猫のひたいのような、一寸した平坦な地が氷塔のかげにある。あたりは乳色のガスでおおわれ、視界は悪く、この広大な斜面の上部がはたしてどんな具合にひらけているのかよくわからない。もう時間も遅い。林登攀隊長はじめサポートのため頑張ってくれた谷、上尾も疲れている。にもかかわらず、いつそのことここに全員、少し無理してでも泊って、サポートをさらにつづけようかという意見がちよつぱり

とび出した。しかし、ツェルトザック（軽テント）の準備もあるとはいえ、ここに張ったテントはもともと二人用だ。食糧も乏しい。もし悪天候にでもなったら共倒れは必定である。

われわれを心配してくれる好意はありがたいが、やっぱり方針どおり三人だけでやってみよう。林さんが別れぎわにわれわれにとつて貴重なはなむけの言葉を残してくれた。「大切なアタックの日に寝坊するなよ！」握手を交したのち、ひとり、またひとりと静かにガスの中に沈んでゆく。重いサポートの荷を肩からおろしたというものの、登攀隊長としての気苦労がその肩にどつかとのつかっているようにみえる林さん。谷、上尾は高度とともに食欲が増し七、〇〇〇メートルの雪を踏みしめて登るラッセルも、日本の冬山のラッセルと同じ調子でやってのけた連中だ。うす汚れ、陽やけたかれらの顔が笑っていた。「高村、まあできるだけやれよ。あかんかったら僕らがすぐ応援に行つてやるからなあ。」

かれらがまだ完全に視界を去らぬうちにテントは張り終えた。しかし、その頃、わたしは突然胸にむかつきを覚え、雪の上に茶色っぽい液体を少し吐き出してしまった。かくさずに言えば、サポート隊がすでに相当遠のいていたことをわたしはありがたいと思った。すぐにテントに入り、夕食の準備にゆつくり時間をかける。リプトン社製のトマトスープにサラダ油、肉、野菜を入れ、別にアルファ米を煮る。スープは、フランス製のキャンピング・ガス。その夜の日記には、「かんたんなオカユを作り、喰う。食欲普通」とある。エアーマットを二つ並べて敷くと二人用のテントは一杯になった。その上に羽毛服を着て羽毛ズボンをはき三人並んで横になり、たった一枚のシュラフザックを拡げてかけた。眼覚し時計は二時に合わせる。いよいよ登頂前夜だ。Ｙさん（斉藤）といろいろ話したい気もするが、バシールの奴が、飯を喰ったらもう用はないとばかり眠ってしまったので、少しでも暖かいうちに眠る

ことにした。

バシールは暇さえあれば眠っている。これはひとつには日本人ばかりのうちに、かれパキスタン人が一人という環境のせいもあるう。しかし、だいたいキャラバン中からそうだった。われわれにとつても、ただでさえ面倒くさい英語を、高い山の上で頭を痛めながらしゃべるのは決してありがたいことではない。かれは立派な英語を話す。われわれとまだるっこしい、舌足らずの会話するのは面白くないだろう。飯を喰ったり道を歩いているあいだに交わす言葉は単純でお互いに疲れない。そういう際に意志の疎通がもし少々欠けたとしても、大したことでもあるまい。たとえば、食事のときに味の素と塩とを間違つて手渡してやるくらいのものだ。ところが食事のあとでゆっくりと交わす会話はそうはゆかない。われわれの何気ない会話にしたところで、これをかれに伝えようとすると言葉を探すのにひと苦勞、それを待つかれもまたひと苦勞するにちがいない。平地でならともかく、ここ酸素の稀薄な上空では、かれのとつた策はまことに賢明であつたといえよう。ただし、かれがはつきり意識してそうしていたのかどうか疑わしい節もある。なぜなら、後日、アタックを終つての帰途、ともすれば雪面に尻をつけたくなるのを我慢して歩いているわたしに、かれはうしろからそつと声をかけたものだ。それも英語とウルドウ語のちゃんぼんで。「ワイズマン、アラーム・カロ（賢者は休養をとるもんだよ!）」。――

いろいろ考え討議されていた第五キャンプも七、〇〇〇メートルの地に根をおろした。あとはとにかくここから突つ走ることだ。しかし、どうもまだ頂上までの距離、立体的に組み込まれた距離がピンと来ない。もうひとつキャンプが要りはないか？ここから上は技術的困難よりも、むしろ単調で長い雪の道だろう。われわれ三人はとにかくまあやってみると、ここにほうり出された前走者だ。平井、岩坪



高度5,300メートルで心電図をとるYさん

という七、〇〇〇メートル以上の立派な経験をもった仲間たちも控えている。谷、上尾はもとより林さんも上向きの意欲にうずうずしている人たちだ。けれどもできればわれわれ三人で頂上まで突き上げたい。頂上にでかけるときはたんなる非常用としてだけでなく、予想されるビバークのためツェルトそのほかの装備・食糧を持つべきだろう。しかし、正直いって出発前にはビバークということをそれほど切実に考えていたわけではなかった。いつもの日と同じように第五キャンプの夜は静かにすぎ、われわれは深い眠りについた。

二、第五キャンプをあとに

全く同じ傾斜でつづいているようにみえた第五キャンプから上の斜面も足を踏み入れてみると、わずかながら緩急があった。第五キャンプからかぞえてふたつめのやや緩い斜面にさしかかったとき、それまで深か

った雪が消えて、シユカブラ（風で表面が固まった雪面）となった。午前十時。テントをあとにしてから五時間半は歩いた。だが高度は二〇〇メートルもかせいでいたであろうか。

眼覚し時計の世話にもならず一時半頃起き出して、雑炊で腹ごしらえをして、ツェルトとキャンピング・ガスそれにごくわずかの非常食をサブザックにつめ、いちどは四時前に出発した。しかし、雪が深いので、アイゼンの上にワカンジキをつけ、快晴のあけがたの空を仰ぎつつ、今度は本当にテントをあとにしたのはすでに午前四時を少しすぎていた。全員コンディションは良好。乾燥粉雪にずいぶん悩まされ、ラッセルを交互にくりかえしながらただひとすじに登ってきた。

シユカブラの斜面は足がもぐらない。ワカンジキを脱ぎ捨てもう背負ってゆく気がしないので雪面におく。アイゼンだけで再び登攀をはじめたところ、わたしはまたしても突然胸にむかつきを覚えた。前をゆくバシールに合図を送ると同時にわたしは雪面に手をついて吐いていた。あわててザックを外そうとしたら、運悪く、これがするりと手から離れて雪の上を転がり落ちて行ってしまった。さいわい、ここは斜面の下がスリバチの底のようにゆるく、カールボーデンのようになっていたので、ザックはとまった。へばっているつもりはなかったけれども、また立ち上ってザックを追う勇氣もなかった。Ｙさんがわたしの様子をみて黙ってひとりザイルをはなれ、ゆっくりともと来たルートをザックの方へ下ってゆく。高度差は三〇メートルくらいかもしれぬが距離は長い。Ｙさんには済まない気持でいっぱいだ。ビバークに必要なものも入っている。帰りに拾うというわけにもゆくまい。平地に近いところならばなんでもないはずの、自分とザックとのあいだの距離が実に遠くに思われた。

Ｙさんは全く元気だ。しかしこんなところでつまらぬ消耗をするのは決して愉快ではあるまい。わた

しとしたところで、ここでYさんの好意に甘えているのは何とも情ない気持であった。これではまるでスキーの片方を流し、ボーイフレンドに拾ってもらうのを待っている女の子、みたいなものだ。しかし、わたしの気持は女の子のようにしあわせではなかった。チョゴリザのときも六、〇〇〇メートルの第四キャンプでひっくりかえっている。あのときは腹具合がおかしくて、その上ストープの生ガスを吸って、意識モーローとなってしまったものだ。あれ以来、わたしは自分の高度に対する適応性に疑問を抱いている。

他人が何と慰めてくれようと、わたしは高度に負かされたという印象はぬぐえなかった。と同時に、若し許されるならば、もういちど高度に挑んでみたいという大それた気持も、持ちつづけてきた。ところが今、わたしはここで高度に負かされているのではないか。サルトロにやってきてからは六、〇〇〇メートル近くで一度頭痛を覚えた。六、五〇〇メートルの第四キャンプでは、食欲が必らずしも充分ではなかった。無理をして飯のお代りをし、それを食べ切ることができなかった。隣のテントにとんで帰り、ふうつと吐息をついたのを誰かは気付いていたにちがいない。わたしはアタック隊に入ることを選び、退すべきだったろうか？自分の力を知って、いさぎよく能力の範囲内にとどまるべきだったろうか？強力なメンバーが控えているこの隊では、へばりながら頂上にむかう奴が許されるはずはない。だが、わたしは頂上に行つて来ますと出かけて来た。日本を離れる前の精密検査でも別段どこにも異常はないとの診断をえている。昨日、今日と嘔吐はしているが、他に自分で気のつくような故障はでない。現に今こうして吐いてしまうと、あとともうさっぱりしている。吐くときの苦しさでうつすらとにじみ出した涙をとおしてみる北のシアチェンの山々は、いつもと変らぬ感動をわたしに呼びさますし、眼の前の

斜面を登り切ればサルトロの頂上が見えるのではないかという期待に心臓もちゃんと高鳴る。そうだが、これはひとつの保障作用だ。吐かなければもっと悪い状態になったかもしれない。吐いたためにちゃんと気分もよくなつたではないか。

わたしのひげづらのボーイ・フレンドが、拾つたサブザックを肩に、すぐそこまで帰つて来てくれた。「大丈夫か」と心配顔のＹさんの問いに、わたしは「大丈夫です」と答える。携行食のウエファースを二、三枚食べ終ると、バシールが「サアイコウ」とＹさんの真似をした。ザックを落してからすでに三〇分が経過していた。

午前十一時。頂上稜線上のピナクル（岩峰）が見えはじめた。それは「かにのはさみ」のようなかたちで突つ立つ黒い岩峰であつた。ハントのいうジャンダルムである。最初はそのはさみの先端がちよつぱり見え、登るにつれて少しずつ基部の方がみえはじめた。小さな岩だと思つていたのにこれは馬鹿でっかいピナクルだ。その上、全貌が見えてからはなかなか大きくなってこないところをみると距離もだいぶ離れている。頂上の左肩に見えたドームはいつのまにかその下方をトラバース気味にラッセルしてすでに通り過ぎていた。

左下、すなわち西へと流れる斜面はすでにリカ氷河の上部斜面だ。雪がまた軟らかくなつた。足が一步ごとにもぐりはじめる。サルトロ・カンリの頂上が見える。頂上からこちら側にのびる南東稜も今は全貌をあらわした。どうしてどうして頂上まではまだまだだ。午後一時。雪はますます深くなり、ピッチは遅くなる。しまった、ワカンジキをどうして捨てて来たのだ。だが、われわれの歩行は一步進むのに数度呼吸をして、というほどひどい状態ではない。歩いている本人は、それでも休みなく歩いている